

## 「国際健康福祉実習を通して学んだことと今後の目標」

国際健康福祉実習に参加して、数えきれないほどの素晴らしい体験をした。日本語授業、ボランティアワーク、施設の訪問、日本食作り、異文化交流など、さまざまなプログラムで多くのことを学んだ。私がこのプログラムに参加した最初の理由は、「異文化を体験したかった」からである。海外での生活、日本との違い、施設での暮らしについて興味を持った。私は今回が初めての海外であったため、それまで日本以外のことについてはよくわからなかった。そこで海外へ行って異文化を体験し、「自分が持っている常識を覆したい」「視野を広げたい」「価値観の幅を広げたい」と考えるようになった。ただ、海外のことについて何もわからない自分が、最初から何か行動を起こすことは難しいと考えた。そのため、まずは「知る」ということを大きな目標にして、今回のプログラムに挑んだ。その目標の達成度は90%である。私はこの2週間で、施設の現状や食生活、交通量の多さなど、小さなものから本当に多くのことを知った。しかし、まだ全てを知ったわけではないと感じる。子どもたちの食事や衛生面など、本当に普段のものであるかはわからない。100%ではないが、私は目標を達成することができたと感じている。この目標を達成したことで、次は自分から action を起こしたいという気持ちが芽生えた。私がそれぞれの活動で得たものや考えたことについて、以下で述べる。

まず、この実習の大きなプログラムであった日本語授業についてである。私は最初、4回ある日本語授業について、正直なところ「多いな…」と感じていた。しかし、実際にやってみると非常に楽しくて、「もっと一緒に日本語を勉強したい」と感じた。そして、このプログラムから学んだことが3点ある。まず1点目は、臨機応変に対応することだ。このことについては、バリに来て身を持って実感した。当初は1つの授業を3時間の予定で準備していたが、実際には約1時間の授業だった。そのときに、どの部分を使って何を削るのか、といったように、臨機応変に対応することが大切だと感じた。2点目に学んだことは、周りを見ることの重要性である。私たちは生徒に楽しんでもらえるように、そのクラスのレベルに合わせてゲームを変えていた。しかし、クラスの雰囲気や日本語のレベルは、教室に入ってみなければわからなかった。そのため、授業をしながら次にすることを決める必要があった。そのときに生徒たちの反応や日本語のレベルなど、周りを見ることが大切だと感じた。それは生徒だけでなく、一緒に授業をしているメンバーに対しても同じである。教室の中が暑かったため、体調を崩さないように、大丈夫かどうかを確認しながら進めていくことが大切だと感じた。そして3点目は、フィードバックの重要性である。授業をやって終わりではなく、どこが良かったのか、何を改善すべきなのか、とフィードバックをすることは非常に重要なことだと感じた。いくら入念に準備をしたとしても、必ずどこか改善できる点はある。フィードバックがあったからこそ、回数を重ねていくごとにより良い授業ができたと考

える。以上のことから、臨機応変に対応することや周りを見ること、フィードバックをすることの重要性を学んだ。

次に、Volunteer Work で学んだことがある。この work では、塀を作るために石やセメントをバケツリレー方式で運んだ。暑い中で重い石を運ぶのは、楽しくないように感じてしまう人もいるかもしれない。しかし、この活動は私にとって最高に楽しいものだった。なぜなら、何かの単語を言いながら石を渡すなど、コミュニケーションを取りながら活動できたからである。意味のわからない単語があったときには、インドネシア学生に教えてもらったりして、楽しく話しながら活動することができた。この塀作りで、インドネシア学生は日本語を、日本の学生はインドネシア語をお互いに勉強することができた。このように笑顔で楽しく活動できたのは、先生や周りの人のおかげであると私は考える。この経験から、次は自分から周りの人を巻き込んで、その場を楽しくさせるような人間になりたいと考えた。私はこの活動で、どんなときにも楽しむことが大切だと学んだ。

私たちは今回、WIDHYA ASIH の 3 か所の施設を訪れた。それぞれの現状を知り、感じたことがいくつかある。まず、この 3 か所の施設には相違点があると感じた。年齢の大きい子が多い Melaya と Cica は Blimbingsari とは違って、自立するための支援をする場所でもあったと感じた。そこには sewing room や computer room があり、将来自立して生きていくための必要な skill が学べる場所があった。しかし、その computer room に computer がなく、実際のところ本当に活用できているのかは疑問に感じた。そして Melaya では、豚や鶏などの動物を、売るために飼育していたことが特に印象に残った。巨大な豚をあまり間近で見たことが無かったため、豚を見たときは驚いた。また、それぞれの施設で部屋の中のものが壊れていたり、ゴミが落ちていたりするのが見られた。他にも、洗濯物が地面についていたり、タオルを干す場所がなく部屋の窓から吊るされていたりしているのも見られた。これらは衛生的にも良くなく、決して良い環境と言えるものではなかった。そして、3 つの施設で共通して感じたことがある。それは、勉強机が少ないことだ。Blimbingsari の施設では、子どもたちは外で集まって勉強していた。私は外で勉強しているのを一緒に見ていたが、夜は暗くて文字が見にくかった。小学生の間は、このように皆で集まって勉強してもいいのかもしれない。しかし中学生や高校生になると、1人で集中して勉強することも必要になってくると考える。私は、もう少し勉強できる環境を整えば良いのにと感じた。子どもたちに「学びたい」という意欲があるにも関わらず、「環境が無いから」と諦めてしまうことがあってほしくない。私はこれらの施設の現状を知り、環境を整えたいと強く感じた。

私はこの 2 週間で、多くのことを学んだ。しかし、生活していく中での自分自身の bad point があった。それはコミュニケーションに関することである。私は「元気？」とか「大丈夫？」と聞かれると、元気ではなくても必ず「元気」と答えてしまう。本当のことを正直に言ってしまうと、周りの人を心配させてしまうかもしれないからだ。日本人は、このように本音を言わない傾向があると感じる。しかし、それは海外の人からすると「どうして本当のことを言わないのだろう？」と疑問に感じることもあるようだ。しかし、私は本当の気持

ちを言えずに常に「大丈夫」と言っていると、miscommunication が起きてしまった。したがって、今後はそのようなことがないように、バリでは自分の気持ちを正直に伝えられるよう頑張りたい。しかし、急に自分を変えるのは難しいことである。そこで、先生から教わった方法であるが、自分の名前を変えて新たな人間に生まれ変わるようにする。そしてもう一度バリに戻って、インドネシア学生とより深い関係を築くことができるようになりたい。

私はこのプログラムに参加し、今後の大きな目標を見つけることができた。その目標とは、英語とインドネシア語を勉強することである。私は今回初めて海外に行って、言語の壁を感じた場面がいくつかあった。それは衛生指導のときに、子どもたちに磨き方を上手く伝えることができなかつたときである。全体で歯磨きの仕方を説明していても、いつものように強く磨いてしまったり、横にだけ磨いて終わったりしている子どもがいた。そのときに「もう少し優しく磨いてね」とか「縦にも磨かないといけないよ」といったことを、自分で上手く伝えられなかつた。また、最初に子ども用の歯ブラシを渡していても、大きい歯ブラシで磨いている子もいた。私は「なぜ子どもは子ども用の歯ブラシで磨くべきなのか」ということを、その場で伝えることができなかつた。本当は全体で教えること以外にも、普段の生活でも歯磨きの仕方を教えることができれば、さらに良かったと感じている。他にも、衛生指導の場面だけでなく、mandi を手伝うときや、子どもたちと遊んでいるときにも言語の壁を感じたことがあった。言葉を話せなくても、ジェスチャーで通じたことも多かつた。しかし、本当は子どもたちともっと話したかった。自分が伝えたいことや聞きたいことがあるのに、それを相手に伝えられないことが残念だつた。インドネシア語や英語を話せなくても、子どもたちや ibu、インドネシア学生と良い関係を築くことはできた。しかし英語やインドネシア語ができれば、さらに多くのことを知り、より深い関係を築くことができたのではないかと考える。そして、英語とインドネシア語を勉強すること以外にも、多くの目標ができた。私はもう一度インドネシアに戻って、やりたいことがたくさんある。だがその前に、施設的环境を改善したい。そのためには、まず英語やインドネシア語を話せなければ伝えることができない。以上のことから、私の新たな目標は英語とインドネシア語を勉強することである。

最後に、私はこのプログラムで村や施設のことだけでなく、自分自身を改めて知るきっかけにもなつた。今後は自分を見つめなおし、パワーアップできるように努力する。そして成長した自分と、もう一度バリに戻りたい。そこで、少しでも子どもたちの力になれるように、自分から action を起こしたい。この経験を活かせるよう、どんなに小さなことでも自分ができることをしたい。このプログラムには多くの方が関わっていて、その方々の協力もあつたからこそ素晴らしい体験ができたと感じている。そして多くの方々から、心に刺さる言葉をもらった。これからは、その言葉を忘れないよう心に留めて行動したい。私は、大学生の間に必ず村に戻ると決めた。そのために今できることをして、将来子どもたちの力になれるように頑張りたい。